

こんにちは！ 歴史資料室の鈴木です。

先日、明治45年（1912）の『東奥日報』に「かちあるき 清水選手と浅虫まで」という見出しの記事を見つけ、清水選手とは何の選手なのかなと興味を持ち調べてみました。すると、『万朝報』が企画した「学生徒歩旅行」の選手だとわかりました。

『万朝報』は、明治25年に黒岩涙香が東京で創刊した日刊新聞です。同紙はこの企画に応じる学生を募集し、選抜試験で選手2名と補欠2名を選びました。2人の選手は、太平洋側と日本海側それぞれのコースでゴールを目指します。さらに、旅のようすと経費、歩いた距離の記録を1日1回以上新聞社に送ることを義務づけられ、その記録が新聞に掲載されました。

太平洋側の選手は専修学校（現専修大学）受験科の清水都代三（21）で補欠は日本大学の富田戒治郎、日本海側の選手は第一高等学校（現東京大学の前身のひとつ）の佐々木好母（24）、補欠はのちに作家となる第一高等学校の久米正雄です。

当初この競争は、東京と越後高田をそれぞれ出発し青森を目指す予定でしたが、選手らの意向で同時に青森を出発する逆コースで行うことになりました。

2名の選手は7月18日に汽車で青森入りし、19日には市公会堂で開かれた市長主催の歓迎会に出席しました。

スタートは7月20日の午後です。まず善知鳥神社境内に選手と関係者、650人以上もの市民や小中学生が集合し、参拝や記念撮影後に、音楽隊を先頭に出発地の諏訪神社へ移動しました。そして14時15分、2選手は握手を交わして東と西に分かれて出発しました。清水選手には浅虫まで、佐々木選手には新城まで見送りの記者が同行し、さきの「かちあるき」の記事は、この記者によるものでした。

この徒歩旅行は早さを競うだけでなく、選手が各地の名所などを訪れ、地元の人と交流し、それらを学生の感性でレポートするものようです。各回の記事には評点がつけられているので、内容や文章の優劣を競わせたのでしょうか。この日、清水は青森市職員の案内で合浦公園を散策、園内の小高い場所から津軽・下北両半島を遠望しました。そして、さらに歩を進め、野内川河口の中州に放たれた馬の群れを眺めて、野内のライジングサン商会油槽所を見学し、同年春に起きた大火の爪痕の残る久栗坂を経て、浅虫温泉に宿泊しています。



合浦公園（『青森県写真帖』1915年、
国立国会図書館デジタルコレクション）



ライジングサン商会油槽所
（『青森県写真帖』1915年、国立国会図書館デジタルコレクション）

そして7月23日、『万朝報』に第1信の「太平洋沿岸」（清水都代三）と「日本海沿岸」（佐々木好母）が掲載されました。両選手は、さらに東北地方を南下します。しかし、こののち清水選手に思わぬ出来事が起こるのでした。

次回は、「学生徒歩旅行」のその後をお話ししますのでお楽しみに！

※今回のトリビアは小谷野敦『久米正雄伝—微苦笑の人』（2011年 中央公論社）などを参考にしました。